J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 160, p. 1 ～ 2 (2025)

巻 頭 言
Foreword

学会のメリットとは？

西村 拓 [1]

2025 年 4 月から第 33 代会長に就任した西村です．ここ数代の会長・事務局の皆様による論文のオープンアクセスへの対応や Editorial Manager の導入など，学会の運営体制について整備が進められてきました．また，若い会員への補助も進めています．一方で学会員数の減少が大きな課題で，それに関連して，学会員になるメリットが何だろうかという問題提起があります．学会費を払って，さらに時々学会の仕事が回ってきたりすると面倒！となると，学会員になることの何が良いのか？と思う人がいるかもしれません．これから入るだろう学生さんに学会に何の意味があるのと尋ねられた時に，自分の研究を発表するのが院生・研究者のノルマで，発表するためには学会に入らないといけないといった説明がされる場合があるかもしれませんが，発表以外に価値は無いの？とさらに問われるかもしれません．また，この答えの延長線上には国際誌を出す以外の学会に存在意義は無い，も見えてきてしまいます．

結論から先に書くと，「科学的なコミュニケーションの場に参加する・できる」ことで個々の会員が成長する機会を得るということが「学会」の重要な役割（メリット）だと思います．科学的なコミュニケーションは世間話とは異なりますし，もう一回り範囲を広げたパブリックコミュニケーションは，社会に出た後には，仕事そのものになります．1994 年にベストセラーになった「知の技法」（東大出版会）に「意見や質問は自然に湧いてくるものではなく，最初から質問や意見を発するという姿勢で相手の話を聞かなければならないが，現実にはそうならないことが多い」ことが指摘されているように，科学的なコミュニケーションを上達させるためには，あるべき姿に至るまでの訓練と場数が必要です．しかし，実際にはほとんど訓練されておらず，個人の資質（ポテンシャル）任せになっていると思います．他方，一人もしく研究室の人数スケールでは，十分多様な情報や「思いもよらない」発想が得られないことがままあります．限られた情報やアイデアから導かれた結論は，不十分であることもしばしばです．より良い研究成果や人材育成をサポートする広範なコミュニケーションの場やディスカッションのスキル向上を担保できるのが学会だと思います．

ベテランの研究者の皆さんには当たり前の話かもしれませんが，研究を始める際には，その研究に意義があるのか，過去に研究されてはいないかといったことを予め確認しておく必要があります．学術振興会に科研費を申請するときも同様です．例としては，学術誌に掲載された論文の INTRODUCTION や「はじめに」の部分に書いてあるような内容を，論文を読んでまとめるイメージです．この作業を「既往の研究をレビューする」と言います．レビューは，基本的に一人（場合によっては指導教員やゼミ仲間を含めた数人程度）の作業です．ある程度，経験や訓練を積まないと，数多く論文を読んでも，その内容がうまくまとまらず，なかなか使えるような知識に組織化されないというもどかしさを感じるかもしれませんが，怠ると後で痛い目に会います．このような情報の知識化（組織化）が不十分としても，頑張って多くの情報を予習した状態で学会（いわゆる研究集会）に出ると，研究集会の場で聞いた発表や質疑応答，さらには過去に読んだ論文を書いた著者本人との話の中で，自分の中で個別に無秩序に存在していた情報がまとまった知識に進化することがあります．特に，自分の研究テーマに近いトピックに限定した小さなシンポジウムにおけるやり取りは，自分の中に持っていた無秩序な情報を一つのまとまったものに組織化する助けになる事が多いように思います．

個人で集めたバラバラな情報を形を持った意味のある知識に変える（組織化する）ことを自力で達成することは苦労と時間を要する作業ですが，他人との議論や意見交換は，情報の組織化を後押しすることができます．学会という組織の重要な役割として，ある程度の共通性（関心・知識）を持ったメンバー（学会参加者や会員）の間のコミュニケーションをきっかけにそれぞれのメンバーが自分の情報を知識に組織化する（簡単に言えば個々が成長する）場となるということがあると思います．今後，AI が情報を集めてきて提示することが普通になると，AI の提示した情報が信用に値するかどうかもこのような場で吟味することになるかもしれません．ここで言うコミュニケーションは，会場で公式に行われるものだけでなく，廊下や懇親会（最近は情報交換会と呼ぶことが多い）での一言二言の立ち話が後に大きな意味を持つようなこともしばしばあります．慣れてくれば，研究集会の場と関係なく，知り合いとの会話の中で意味のある言葉を拾い上げることもあると思いますが，小さな情報にも敏感になるということも，学会とい

[1] 東京大学大学院農学生命科学研究科

う場で様々な形のコミュニケーションを重ねるうちに育成されるスキルだと思います．

近年，業績評価の関係でインパクトファクターが付くような国際誌に論文を出すことを求められる傾向にあります．インパクトファクターの是非はここでは問いませんが，海外の国際誌に論文を発表するので，日本国内の学会には用は無い！というような考えに至る人もいます．国際誌に論文を投稿すると当然のことながら査読という審査をうけます．投稿した原稿を担当するボランティア（無報酬）のエディターや査読者の姿勢次第では，帰ってくるコメントが有用であることが多いと思いますが，担当エディターや査読者は必ずしも自分が投稿した論文に精通しているとは限らないのにも関わらず，どうして自分に有用で意義のあるコメントを返すことができるのか考えてみたことはあるでしょうか？彼らが筆者に対して有用なコメントを出すのは，そのための教育をどこかで受けてきたというよりも，国際誌を支える学会を中心とした研究者コミュニティの中でくり返されるコミュニケーションを通じて，理解 · 応答可能な学術範囲が拡張し，ここが肝心であるという要所把握能力が育成されることと，意味のあるコメントを返すこと自体がコミュニティへの貢献になると考えている，と理解することが良いように思います．国際誌の学のレベルを支えるコミュニティ（学会等）は自然に存在するものではなく，これを維持するためには，相応の費用とエネルギー，時間と労力が関係者から投入されています．論文を投稿 · 掲載することで，彼らの努力の成果の上澄みの部分を使わせてもらうと考えると，著者側にも便益を受けた分，お返しする責務が生じると言えます．国際誌に投稿するだけでなく，その国際誌を支えるコミュニティ（たとえば，米国土壌科学会や国際土壌科学連合（IUSS））に積極的に関わっていくことも可能なので，これも著者が未来に貢献できる一つの選択肢だと思います．また，広い意味でそこに繋がるだろう国内の科学コミュニティ（たとえば土壌物理学会は学術会議 IUSS 分科会を通じて IUSS に繋がっています）に貢献するやり方もあると思います．いずれにせよ，論文を発表することには，掲載を希望する学術誌を支える科学コミュニティへの貢献が付随してくると考えることが望ましいということです．これは，登尾前学会長が以前，土壌の物理性に書いていた，「論文の掲載には最低 2 名の閲読者が必要であることを考えると，論文を発表した人は最低でも 2 本の査読に貢献すべき」ということにも繋がります．

日本人の多くは，教育システムのためか，社会的特性のためか，積極的に議論をすることを躊躇う傾向にあると言われることがあります．同様に学会シンポジウムのような公的な場で気軽に発言することも心理的に敷居が高いようです（以前，学生時代はほぼ質問しなかったのが，就職して会社に入ったら質問することが楽しくなったという卒業生がいたので，単に慣れなのかもしれません）．したがって，学会の機能（コミュニケーションの場）を十分に発揮させるためには，上述の知の技法で取り上げている議論の訓練まで遡らなければいけないかもしれません．インターネットが発達した近年の学会は，数十年以上前のような学会が新しい知見の発表の場である時代とは異なります．当学会の年次大会のシンポジウムや他のもう少し大きな学会のテーマ毎のセッションは，研究成果拝聴の場というよりも，意見交換のためのディスカッションの場になる事が望ましいように思います．当学会のシンポジウムにおいても，多くの人は，映画を見に行くように，発表を視聴しに来ているお客さんになっていて，一部の少しスタンスの違うメンバーの発言が目立つかもしれませんが，より多くの聴衆が質問なり意見なりを発することで話題提供者と聞く側の間の双方向のコミュニケーションが成立するような場になると，学会大会の雰囲気も変わるように思います．一人の客からシンポジウムやセッションを成立させるための構成員の一人へと関り方が変わると学会や学への愛着も沸くのではないかと期待します．

年次大会のシンポジウムやポスターセッションの場合，頻度も時間も制限があるので，たとえば，COVID-19 をきっかけに身近になったオンラインミーティングや場合によっては地域限定で周辺の人が集まって対面で話題提供 · ディスカッションする場を作る等，院生を含めた若い研究者にコミュニケーションの機会を質的にも量的にも増やしていくことが必要かもしれません．練習を重ねると発表がうまくなると同様に，場数や訓練を詰めばディスカッションのスキルも向上し，質問や回答もうまくなります．もし，大学院生が内容的についていけないというのであれば，以前いくつかの大学で行われていたような学会参加直前の勉強会をオンラインで開催するといったことも考えてみて良いと思います．

土壌物理学に関する議論を可能にする場として，学会を国内で維持することはとても重要だと思います．論文発表はルールありのスポーツ競技に似ている部分があり，一旦査読を通過して学術誌に掲載されてしまうと，不適切な情報が正しいものとして流れてしまいます．重力水や最大容水量を考慮した水分調節など土壌物理学関係の概念や用語ではこれに類することがままあります．また，モニタリング技術が大きく発展したのはこの 20 年程の出来事であるため，この分野にはまだまだ解明すべき課題が残っています．ディスカッションの場だけでなく，より正しい情報の普及や科学レベルの向上を含めて日本における農学や環境科学において土壌物理学という科学分野が必要だと思われますし，その成果を海外に発信していくことも（先進国に含まれる日本人としては）重要です．そのためのコストとして会員の皆さんにおいては，新会員の勧誘も含めて少しずつ学会に貢献していただけると大変ありがたく思います．